



文法解明叢書

藤村文学要解

村田治夫著

有精堂

文法解明叢書

藤村文学要解

村田治夫著

有精堂

本書は著者と
合読の上検印
を省略しまし
た

昭和三十年十月二十日 印刷
昭和三十年十月三十日 發行
昭和三十一年三月一日 再版發行

文法解明叢書

藤村文学要解

著 者 村 田 治 夫

發 行 者 東 京 都 千 代 田 区 神 田 神 保 町 一 ノ 三 九
山 崎 清 一

印 刷 者 東 京 都 墨 田 区 東 阿 国 四 ノ 七
福 神 和 三

發 行 所

東 京 都 千 代 田 区 神 田
神 保 町 一 丁 目 卅 九 番 地
振 替 口 座 東 京 四 〇 六 八 四 番

有 精 堂 出 版 株 式 會 社

定 価 ￥ 100

地 方 売 価 ￥ 105

凡 例

一、本書の引用文は底本として新潮社版藤村全集によった。現在ではこれが最も正しい決定版であるからである。但し「破戒」のみは、筑摩書房版、現代日本文学全集島崎藤村集によった。「破戒」の初版本はこの版だけであるからである。

一、仮名遣其他文章全般は原文通りにしてある。ふり仮名のみは新仮名遣に改めた。

一、巻頭の「生涯と作品の概要」は藤村の生涯が見渡せるように記したが紙数に制限があるので微細な点にはわたることが出来なかつた。

一、巻末に年表及系譜と索引とを附した。年表は社会と文壇の概要がつかめるように考慮した。系譜は作品を読む時の便利を考えて作品の中に出る仮名を添記した。

一、索引は、藤村に関する事項を略々年代順にしたものと、本書中の主な人名と、同じく主な書名、及び語句の四種に分けた。人名、書名、語句は五十音順に並べた。

一、文法略符号表

名詞 〓 名 副詞 〓 副 感動詞 〓 感 接続詞 〓 接 形容詞 〓 形容 形容動詞 〓 形動
助動詞 (完了 〓 完助動 打消 〓 消助動 未来 〓 未助動 過去 〓 過助動 比況 〓 比助動)
助詞 (格 〓 格助 接続 〓 接助 副 〓 副助 終 〓 終助)

目次

一、島崎藤村の生涯と作品の概要

- 一、出生から明治学院時代……………一
- 二、関西漂泊の時代……………二
- 三、詩人としての時代……………三
- 四、小諸の生活と「破戒」……………四
- 五、新片町の時代……………四
- 六、フランスの旅……………六
- 七、飯倉時代……………六
- 八、麴町と大磯―死……………九

二、藤村文学解明のために

- 一、藤村の文章……………二
- 二、小説結末の共通点……………二
- 三、藤村の血……………二
- 四、藤村の家……………二
- 五、藤村の自然主義……………三
- 六、自然主義とは何か……………四
- 七、日本の自然主義……………四
- 八、日本の自然主義作家とその作品……………四
- 九、藤村の主な作品とその解説……………五

(要解)

一、詩

- 詩集の序……………一六
- 千曲川旅情のうた……………二
- 草枕……………三
- 秋風の歌……………三
- 椰子の実……………三

二、小説

- 破戒(一)……………三四
- 同(二)……………三七
- 同(三)……………三七
- 同(四)……………三六
- 春(一)……………四〇
- 同(二)……………四三
- 藤村集(芽生)……………四三
- 家(一)……………四八
- 同(二)……………五三
- 微風(一) (突貫)……………五五

微風 (2) (神田川の岸)	五九
桜の実の熟する時 (1)	六〇
同 (2)	六四
同 (3)	六五
新生 (1)	六七
同 (2)	六九
嵐	七一
夜明け前 (1)	七五
同 (2)	八三
同 (3)	八七
三、随筆・感想	
後の新片町より (1) (黒船)	九二
同 (2) (秋の歌)	九三
同 (3) (フロオベルとモウパッサン)	九六
飯倉だより (1) (三人の訪問者)	九八
同 (2) (北村透谷二十七回忌に)	一〇四
同 (3) (初恋)	一〇六
同 (4) (初学者のために)	一〇六
春を待ちつつ (1) (大正十四年を迎へし時)	一〇八
同 (2) (春を待ちつつ)	一一一
市井にありて (1) (言葉の術)	一一三
同 (2) (故樋口一葉)	一一五
桃の雫 (1) (六十才を迎へて)	一二七

同 (2) (大きな言葉と小さな言葉)	一二八
同 (3) (寝物語)	一二〇
同 (4) (文章を学ぶもののために)	一二三
回顧 — 父を追想して書いた国学上の私見 — ある人々に	一二五
四、スケッチ・紀行	
千曲川のスケッチ (1) (落葉)	一二七
同 (2) (収穫)	一二九
同 (3) (川船)	一三一
仏蘭西だより (1) (再び巴里の旅窓にて)	一三三
同 (2) (ある友に)	一三五
海へ (1)	一三七
同 (2) (故国に歸りて)	一四一
同 (3) (同)	一四三
巡礼 (北米雜記の一)	一四四
五、藤村を中心とする年表	一四七
六、島崎家系譜	一五九
七、索引	一六〇

島崎藤村の生涯と作品の概要

一 出生から明治学院時代

信州馬籠 長野県西筑摩郡神坂村馬籠に明治五年（一八七二）に生れた。旧中仙道、（東山道とも云い、又木曾街道とも云う）木曾路の西のはずれに当るが、現在では中央線がこゝを通つていないため、落合川駅か中津川駅から入る。きわめて小さな宿場である。本名春樹。

家系 祖先は古く馬籠に入つて、代々、庄屋、本陣をつとめ藤村の父島崎正樹は、十七代に当ると言われている。父正樹は「夜明け前」に青山半蔵として写された人物で、非常に濃情の人、平田派の国学にこつて、平田篤胤あつたぬ歿後の門人として、篤胤の嗣平田鉄胤てつたぬに入門し、和歌も良くし、後に藤村が編んだ遺稿集「松ヶ枝」がある。平田門人として活躍したい意志は有しながらも、宿場の取締りとして、本陣、問屋、庄屋の当主としての責任に縛られ、悶々の中に馬籠に狂死した。（実際は狂死というのとはあたらないのであるが）。正樹には四男三女があり、藤村は四男である。父は非常に教育に熱心な人物で四男の春樹には早くから学問を教えこみ目をかけていた。

上京 父はしつかり勉学させたい考えから明治十四年（一八八一）藤村十才の時、兄友弥と共に上京させた。京橋鎗屋町の長姉高瀬園子の家に寄食することになり、こゝから数寄屋橋畔の泰明小学校に通学した。一年上に北村透谷がいたのも不思議な縁である。

吉村忠道の家 姉一家が木曾福島にひきあげた後、同じ木曾出身の吉村忠道宅に寄食することになったが、この吉村忠道は藤村は終生恩人とよんだ。書生を愛する心深くよく若い者の心を理解したことは藤村にとっては幸福であった。後に「千曲川のスケッチ」を捧げた、吉村樹ゆきむらはこの人の長男で早くから藤村を兄となつていた人である。家の中には下町の雰囲気が漂い、理智的学問的な家庭ではなく、芝居の役者の声色が洩れたり、三味線の音が聞えたりする家であったが、藤村はよく書生としてつとめた。

明治学院入学 上京後十三の頃から石井甚吉につき英語を学び、つゞいて十五の時、三田英学校に入って英文を学んでいたが、明治二十年（一八八七）十六才の時、明治学院へ入学したことは藤村の将来に大きな影響を与えた。政治も文学も新しい気運に燃えていた頃で、藤村も人並に政治熱にかされた。すぐれた米人から受けた感化は藤村の生涯忘れぬところであった。高輪台町教会で洗礼を受けたのもこの頃である。だが、心から受けた洗礼ではないのでクリスチャンとしての藤村の色は濃くないのである。学院を卒業したのは二十四年二十才の時だが、この頃から実家が傾きかゝつて来て、その重荷が藤村の肩にかゝつてくることになる。父は明治十九年藤村十五の時に死んだ。

二 関西漂泊の時代

巖本善治を知る 学院卒業後一時吉村家の手伝いとして横浜伊勢佐木町の雑貨店「まからずや」につとめたこともあったが、当時キリスト教の大立物として声名高かった、巖本善治と識る機会があり、その発刊する「女学雑誌」と関係することになった。これが文学者として立つ藤村の生涯を決定したものである。この「女学雑誌」を通じて、北村透谷をしり、後々非常に大きな影響を受けた。この「女学雑誌」は後の「文学界」の母胎である。巖本善治の妻は、筆名若松賤子わかまつせんこと言ひ、閨秀作家であつた。

恋愛の苦 巖本善治は一方に、進歩的な明治女学校を経営していたが、二十五年十月藤村は明治女学校に教鞭を取り、生徒の一人、佐藤輔子すけこを愛するようになった。輔子も亦熱烈に藤村に傾倒したが、既に輔子には盛岡に許婚者があり二人の恋愛はどうにもならなかつた。藤村はこの苦を逃れんが為、二十六年の春、吉村家を出て、単身関西漂泊の旅に上つた。

文学界 この二十六年（一八九三）の一月、星野天知てんち、同夕影、平田禿木とくぼく、島崎藤村等は「女学雑誌」にあき足らず、同人雑誌「文学界」を刊行した。古い日本の文学の制約を受けず外国文学の強い影響のもとに、若い純粋な世代の知性を集めて日本浪漫主義の母胎となつた雑誌で、後に戸川秋骨、馬場孤蝶、上田敏びんが加わり、客員としては北村透谷、樋口一葉らが出たが、実際は、透谷が中心となり縦横の論陣をはつたのである。藤村は関西漂泊中の感想、詩

作の類をこの「文学界」に載せた。戯曲なども書いた。文体には大きな芭蕉の影響が見られる。単に文体に於いて影響が見られるのみならず、この漂泊そのものが芭蕉の旅に模したものであった。佐藤輔子は二十八年の八月に死んだ。

三 詩人としての時代

仙台の時代 東北学院講師として仙台に出發したのは、明治二十八年（一八九六）八月である。仙台で藤村は自らよく言う「夜明け」が来たような感じであった。今までの暗い過去が一切葬られて真に青春のよるこびに満ち溢れた時代であった。何を見ても新しい意味がよめた。驚異の連続であった。そのよるこびが口をついで出て詩になったのである。東北学院の書庫にひたつてむさぼるように読んだ。うたった。これがまとめられたのが「若菜集」であり、日本の近代詩のあけぼのとなった意義深い詩集であった。つゞいて「夏草」「一葉舟」と詩集を出し、明治三十二年小諸へ移つて最後の詩集「落梅集」に収められた数々の詩をかくと共に詩人と欠別することになる。

落梅集 本詩集は最後の詩集であるが、既に散文へうつらうとしていた藤村はリアリスティックな観察を主としていた頃とて、この詩集中には、最早「若菜集」に見られるような軽い若さがなく、重々しい落ち着いた口調になっている。有名な「千曲川旅情の歌」「椰子の実」（とまもも）「常盤梅」等はこの中に収められた。「落梅集」を最後に藤村は詩作を絶った。後に松本職業学校及明治学院の校歌を作つたぐらいのものである。

四 小諸の生活と「破戒」

散文作家としての歩み出し 嘗ての恩師木村熊二の招きに依り、小諸義塾教師として浅間山の麓に居をうつしたのには北海道函館の秦冬子と結婚した年、明治三十二年の四月、二十八才の時である。小諸義塾は二十六年の創設になり塾長は木村熊二。こゝで藤村は非常にきりつめた生活をしながら、石ころの多い土地に自ら鋤をとって畠を作り、寒さに凍みさける柱の音を聞きつゝ高原の冬に耐えて、地方の農民のさま、土地の様子を写して多くのスケッチを作つ

た。觀察は藤村の只一つの武器であつたのである。こうして自然主義作家としての藤村が生れてくるのである。田山花袋、柳田国男等が、この高原を訪れた。藤村はそれらの友人と共に、フランス、ロシアの作品にしたしんだ。長女縁、次女孝子、三女縫子が生れた。妻と三人の子を抱えて義塾の俸給では苦しく、味噌汁一ぱいのお菜にその日くをしのいだこともあつた。はげしい精進がつづいたため、子も妻も充分な栄養がとれなかつた。「旧主人」「蘆草履」の二つが最初の小説として双生児のように生れたが、「旧主人」は発売を禁止された。つづいて「老嬢」「叢」「水彩画家」等がかゝれた。

破戒 一方に俸給をとり生活の安定を策し、その余裕で小説を書くといふことは安心のようであつて、実は小説一方に専念することが出来ない。さらでも苦しいのに藤村は義塾の教師をやめて、一かばちかで小説と取りくんだ。全く生か死かの境地である。「破戒」の構想が熟して机に向つたが、この間の生活の援助なしには妻子が飢え死ぬばかりであつたので、藤村をよく理解していた土地の素封家神津猛に援助をたのんだ。神津は専心藤村の援助を惜まなかつた。藤村は、どうしてもこの出版は東京でせねばならぬと決意し、遂に三十八年の四月東京西大久保に移つた。「破戒」の稿はすすんだが、多くの労苦がたたつて、五月に三女縫子が栄養不良で死亡し、つづいて、翌三十九年に、長女縁、二女孝子とつづいて世を去つた。「破戒」はこれら尊い犠牲の上に立つて、明治三十九年三月、「緑蔭叢書第一篇」として自費出版された。これは当時の出版界にあきたりなかつたが故であり、その費用は函館の、妻の父秦慶治にあおいだ。「破戒」は、秦慶治、神津猛二氏に捧げられている。「破戒」は真に日本の自然主義作品としては最初のものであり、その中に含まれた社会批判を始めとして、一切の描写は、日本の自然主義が次第に私小説におちてゆく前の本格的自然主義作品たるの偉容を示している。

五 新片町の時代

新片町 新片町に移つたのは明治三十九年十月、三十五才の時である。現在の両国柳橋を渡つた花柳の巷の真只中ままたちで神田川が隅田川にそそぐところ、三絃の声も聞えてくるところである。こう言う場所に居をしめるのも藤村の一面

を語っている。

春 ここで東京朝日に、第二の長篇「春」を四十一年の四月七日から八月十九日まで連載した。これは漱石の「坑夫」の後をうけたのである。ここには北村透谷を中心とする若い「文学界」同人の群像が描かれている。浪漫的作家群の明治のかたみの一つであろう。又短篇としては「藤村集」「食後」に収められた数々の作品を書いた。併し藤村の短篇が、短篇小説として真に輝き出すのはフランスから帰って後であり、この当時の短篇は長篇の一つの準備的試作品の感が深い。「千曲川のスケッチ」がまとめられたのもこの当時である。

家 「春」について「家」を明治四十三年の一月一日付読売新聞から連載し始めた。五月に上巻が完結した。下巻は「犠牲」と改題して、翌四十四年の一月及び四月の中央公論に載せた。「家」は「夜明け前」と匹敵する傑作であつて、木曾の島崎家及び高瀬家を中心に、封建制度の亡霊のような家の精神を自然主義的手法を以てえぐつた作品である。「春」には詩的な要素があるが「家」を書くに当つてはつとめて之を抑制しようとした。

妻の死と新生の事件 「家」を書きつつある頃即ち藤村三十九才の時、柳子が誕生したがこれとひきかえに夫人冬子が三十三才を以て逝去した。これより先六月には、愛していた甥の高瀬兼喜が三十七才で死去した。「家」に正太とある人、藤村は相当の衝けきを受けたのである。藤村の苦しい時を共にし、おそらく安逸幸福な日とはなかつたであろう夫人はまことにいたましい。これも亦大きく見れば藤村文学の一つの犠牲でもあつたと言ひ得よう。藤村の二番目の兄広助の次女にこま子と言う女性があつた。この人が姉久子とともども夫人なき後の藤村の家庭の面倒を見ていたのだが、いつしか藤村と結ばれ、こま子は藤村の子を宿した。姪と叔父との結婚はみとめられない。藤村はひたかくしに之を周囲にかくしつゝ何とか自分も姪も救われる方法はないものかと苦しんだが、この間の事情は当時誰も気がつかかなかつたのである。所がたまたまある酒席の会合があつてその席上ある一人の友人が、どうだ君も外国辺りへ出かけてみたらと座興に言つたことがきっかけになり、藤村はフランス行を決意したのである。自分は姪を残してフランスへ。時期が解決してくれるであろう。姪はひそかに他にあずけて子をうませ、それを人にくれてやつて、嫁に行つてもらふ。腹の中を割つてみるとそんなものであつた。そして、自分はこの行き詰つた生活を打破するため

フランスへ行つて、再生して来て一切の過去を清算しよう。こま子とのことはこま子の父にも知らさず、大正二年の四月、仏国船エルネストシモン号に乗り、十三日の夜神戸の港を後にした。

六 フランスの旅

平和の巴里 藤村はこのいきさつを船上からこま子の父、即ち藤村の次兄宛書きにくい手紙を書いて許しを請うたが、次兄も亦島崎家の名譽のため、誰にも秘したので、誰も知らず、ただ勉強のためのフランス行と思つていたのである。巴里に入った藤村はフランス語をまなぶと同時に、時として芭蕉の文集を膝の上にひろげて深い嘆息に沈む人であつた。こま子からの便りも来た。子供らからの作文もどいた。その中に第一次歐州大戦が勃発したのである。リモージュの秋 巴里も危いと言われて在留の人達はそれぞれ安全な方面に避難していった。藤村は下宿していた宿の主婦の近づきでリモージュに逃れた。正宗得三郎画伯と一緒にあつた。巴里が安全になるまでここで秋を過した。

帰国 滞在費もかさむ。友人からの援助もそう期待出来ない。のこしておいてきた子供らのことも気にかかる。これだけ苦しんだら許されても良いだろう。こま子の気持もしずまったようだ。藤村はそこで帰国を決意した。あの黒々としたひげを剃りおとして。

七 飯倉時代

飯倉 大正五年四月巴里を立ち、ロンドン經由で帰国の途につき、七月四日神戸に着いた。未だ旅心も定まらぬ中に書いたのが「故国に帰りにて」であり、つづいて翌年「海へ」「地中海の旅」「燕の如く帰る」を書いた。この中「地中海の旅」は、父への音信の形式を以て書かれ、罪深き身が、父を慕う切々のあわれみがのぞかれる。父も亦自分と同じ血に悩まされた濃情の人であつたことを思い、この苦は父のみが知るところと藤村は父の膝にすがりつきたかつたであろう。「夜明け前」を書く芽生えが既にここに見られるのである。麻布飯倉片町へ移つたのは大正七年の十月

で藤村時に四十七才。これから円熟と沈静の飯倉時代が訪れてくるので、藤村の生涯はここではつきりと二分される。即ち苦悩の時代の飯倉以前と、老成と円熟の時代の飯倉以後と。

新生 ルソーは早くから藤村に影響を与えたフランスの思想家であった。その「懺悔」は藤村の愛読書でもあった。告白は自己の救いとして最後のものである。本当に自分を救おうと思つたら、いさぎよくこま子との関係を公表し、鞭打たねなければならぬ。しかしこの告白は、その性質上、こま子はもとより島崎家の多くの人、又関係ある人々に迷惑を及ぼすであろう。例えそれが創作として高度のものであつても、併し自分を生かすためには已むを得ない。もし之で社会から葬られるものならいさぎよく葬られよう。こうして「新生」は執筆されたのである。大正七年の五月一日その第一回が東西の朝日新聞にのり、同年十月五日、一三五回が載つて第一部が完結、第二部は翌八年の八月五日付の朝日新聞に載り十月二十四日一四一回を以て完結した。単行本になつたのは、第一巻が大正八年の一月、第二巻が同年十二月である。

飯倉の生活 世相も次第に悪くなつてきた。子供等も次第に大きくなる。日々の新聞は子等の目を覆いたいことばかり。母ともなり父ともなつて、穴倉のような簡素な住居に子を守り育ててゆくこの時代が、藤村にとつては一番楽しかつた時代かも知れない。髪は最早半白であるが、心は水のように澄んできていた。軍部の勢力も次第に力をまし、町にはメーデーの最初の行進も見られる時代となつた。「内も外も嵐だ」とはこの時の嘆息であつた。敷島を煙に吹きながらじつと坐りつづけるこの人は、文明批評家としての態度もはつきりしてきてきた。こうして名作「ある女の生涯」「伸び支度」「嵐」「分配」等一連の珠玉のような短篇が生れてきたのである。自分の心にも、ある終止符を打つ意味に於いて、大正十一年の一月から藤村全集十二巻を刊行した。

處女地 この藤村全集の印税を以て、婦人達のみで作る雑誌「処女地」を大正十一年の四月から刊行し始めた。進歩的な女性を集めて、婦人の智的向上と解放とを目的としたこの雑誌も翌十二年の正月に廃刊になつた。この処女地同人の中に、第二の藤村の夫人、加藤静子氏もいたのである。一方童話にも手をそめて、帰朝早々「幼きものに」を、つづいて九年「ふるさと」、十三年に「をさなものがたり」を出した。

長男を故郷に送る 都会は墓場だ、そこに人間はいないとは藤村の心をうっていた言葉だ。いろいろな状況を考慮して長男の楠雄を自作農として故郷へ送り歟取る道にたずさわらせることも、子への愛ではないか。土に親しみ、農としての生活の中から、真に人間的なものが生れてくればこれ程重要なことはない。藤村の決意は固かった。今馬籠藤村記念堂の横の「みどりや」はこの長男の家である。次男、三男はそれぞれ絵の道へ進んだ。

分配 昭和初頭は所謂円本時代であった。殊に改造社の日本文学全集（一冊一円だから円本と言った）は当った。作家のふところに思わぬ大金が入りこんで来たのはこの時である。藤村はこの金をそれぞれの子供に分配した。後、次男鷗二と、三男翁助とはこの金で絵の勉強のためそれぞれ海外に旅立っていった。この辺にも父としての藤村の細心の留意が見られる。小諸の懐古園に、千曲川旅情の歌の詩碑が建ったのもこの時である。藤村はこの頃からそろそろ「夜明け前」の準備にかかった。

夜明け前 大作と取りくむ為には、一人では何かと不自由である。やがて老を迎えようとするには良い道連れもほしい。子供らも大きくなってそれぞれ独立して行った。第二の結婚を考えてもいい頃ではないか。藤村はこんな心で曾て「処女地」の同人であり、川越の医者の出である加藤静子と結婚した。しかしこの結婚には子等の反抗もあつたらしく、後静子夫人と子供らの仲は必しも良いとは言えなかつた。父のことについては、死んだ姉高瀬園子からも、又周囲の人からも折にふれて聞いた。聞く度に藤村はこの父の血を怖れた。この血が自分の血脈の中を流れているかと思うと慄然とすることもあつた。自分はうすぐらい亡霊のような封建的な「家」のどんよりした空気を吸い、そしてこの父の狂うような異常な血を受けて構成されているのではないか。これは若い中から藤村を苦しめてきた課題だ。藤村の文学はこの解決の中から生れ出たものであるとも言ひ得るのである。父を見つめ、父の時代をしり、そして父を描いてみたい、これは藤村の念願であつた。藤村の悲願とも言ひべきものであつた。幾度か馬籠へ行き古帳をしらべノートすべきものはノートされ慎重に準備がすめられて行つた。第一部序の章が中央公論にあらわれたのは昭和四年の四月、二男鷗二がフランスへむけて出発した直後であつた。時に藤村五十八才。最後の情熱を燃やして書きつづけられ、第一部は昭和七年一月に完了、つづいて第二部が連載され、終りの章が載つたのが、昭和十年の十月

六十四才の時であつた。内容については本文の方に解説しておいたからここには省く。完結と同時に、朝日文化賞を受けた。軍部の権勢益々強く世論は黙し勝ちであり、美濃部博士の天皇機関説が問題となり、国際聯盟を大見得切つて脱退したのもこの年である。老を迎える藤村は、世情の行く途を考へて心痛むものがあつた。

—南米の旅へ— この昭和十年には日本ベンクラブが創立されその発会式があげられ藤村が会長におされた。翌十一年南米ヴェノスアイレスで万国ベンクラブ大会が行われる為「夜明け前」の疲れがぬけ切らぬうち、六十五才の老令を以て南米にゆくことになつた。これには藤村として深い心があつたのである。当時日米の關係は甚だ面白くないものがあつた。日米だけではない、世界の民族が互いに苦惱と闘争との中であつた。多くのベンクラブ會員が寄つたところでこの国際状勢を如何ともすることが出来ないことは分つてはいるものの、それでも文芸の力でこの民族の闘争を和げることが出来るならばとの望みもあつたのであろう。現にこの会で藤村は、民族の思想の交流と理解とを目的とする国際機関紙の発刊を提唱しているのである。夫人同伴、有島生馬と共に日本を発つたのは昭和十一年の七月であつた。移民の集団と同船し、その移民の取扱ひの上にも藤村らしい批判の眼を光らせながら。ベン大会そのものは大して収獲もなかつた。各国がてんでんばらばらに言うことを言っている会場は、時として何を議しているかも知らぬことがあつた。この行で藤村は雪舟の山水長巻の複製を持参し、自ら雪舟についてその芸術を説明する機会を作り、日本的なものについて理解を深めようとした。藤村に言わせれば、今の時代程相互理解の重要な時はない。歴史を回顧してみる時に、福沢諭吉、内村鑑三等を生んだ時代の青年等は相互の理解に並々なぬ努力を示した。次第に人の心がかたくなになり、島国的独善性がのさばり、軍の独占的権力は民衆の声を押し始めた。互の愛と理解なくしてこの歩み難い世を乗り切ることが出来るようか。藤村は、ボストンに遺る岡倉天心の遺愛の数々の品を見つめる時に、この天心が遠くアメリカに知己を求めた心を想い、感慨無量であつた。広く知識を世界に求めるほどの大きな心はどうしたか。危険な島国的根性を痛感しつつアメリカは未だ若々しいことを思い見ながら翌十二年の正月帰国した。

八 麴町と大磯——死——

巡礼 このアメリカ行の紀行を「巡礼」と藤村らしい題を附して改造に連載し出したのは、十二年の五月からであった。これは十一月までつづけられたが、遂に病氣の為中止し、病のなおるのを待つて、十四年の四月から続篇としてつづけられ、十五年の正月号で完結、二月に岩波書店から単行本として刊行された。

静の草屋 帰国後一時帝国ホテルに入っていたが留守中から建築にかかっていた麹町下六番町の新居が出来たので十二年の一月末ここに移った。この年帝国芸術院会員たることをすすめられたが自分はあくまで一著作家でありたいと之を辞退した。この麹町の寓居を静の草屋と名付けた。之は藤村の父正樹が、自らの住居を静の屋、観山樓と名付けたのになみ、又、平田篤胤の著「静の岩屋」にもちなんだものである。

大磯の家 神奈川縣大磯に家を借りたのは、十六年の二月で、戦の色漸く濃くなつてきた頃であった。

東方の門 昭和十五年六十九才。世上騒然。町には盡忠報國の白襪に万才（天才）の声が唖する。世界の苦を見て来た藤村は、日本の進路を如何に感じたか、中世の否定は「夜明け前」の半蔵の歩いた途であった。この半蔵の歩いた途を否定するところに「東方の門」の書かれた意図があった。「東方の門」は、文明批評家としての立場に於いて筆を執る野心作であった。藤村は「こんどの仕事は実にむずかしい」と夫人に語った。半蔵の誤りは、中世をただ混乱暗迷の時とのみ見る観方から来ていることで、中世なしには近代日本の出発のなかつたことを考える時に、藤村には、日本の中世を一図に否定した父が惜まれたのであった。一図に古代復帰の夢を描くの余り、ただ中世を暗いもの、異端なものとして排斥した平田派国学者のかたくなな態度を批判し、中世を通ることなしに、第二の春を求めるとは不可能であると藤村は結論するのである。日本の中世の地位を考え、雪舟あたりを近代の曙光として、父の歴史——その悲劇のよつてくるところを今一度省みて、幕末から明治へかけての武士の柔かく大きな抱擁力とその見識を思い、先人らが近代のヨーロッパに求めたもの、海外から入ってくるものに対する応接、そして明治の青春期、人として、岡倉天心、吉江喬松、内藤湖南、国木田独步、原勝郎——之らが「東方の門」の構想であった。

死 併し遂に「東方の門」はその緒についたばかりで藤村は筆を投げねばならなかつた。十七年の五月には、一週間程を京都に送った。晩年藤村は夫人に語った「歩けば歩く程、ゆけばゆく程、澄んでくる……それが進歩だ」と

「老令慈々美貌であり、声を低く、つきあいよく、くさみも気どりもない」とはある人の語る藤村晩年の印象談である。大磯の濤声を、うちよせる太平洋の波音をこの老文豪は如何なる心で、遠くなつた耳に聴いていたであらうか。その日、昭和十八年八月二十一日、午前九時半頃、夫人に前日書いたところを読ませていた。俄かな頭痛「涼しい風だね」と言いつつ昏睡状態に入り、その夜半、遂にしずかにこの世を去つた。享年七十二。戒名、文樹院静屋藤村居士、墓は生前愛した土地、大磯の地福寺境内、梅の古木の下にある。

藤村文学解明のために

(1) 藤村の文章

藤村の文章は決して名文ではない。極端に言えば悪文に近いかも知れない。はつきりと主旨を握むことが非常に困難な文章である。妙にもつてまわつたように物を言いまわす。直接にはつきりと言い切らない、何か意味あり気に含んだものの言い方をする。これは初期になる程強いのである。「春」の中の例を二、三拾つて見ると、

これはよく出てくる一つの癖である。

急に若々しい血潮が岸本の頬に上つた

これは顔が赤くなつたと言うこと、
彼は自分で自分の性質を差ぢた。

「自分の性質を差ぢた」で分るところを、こういう勿体振つた表現法をとるのである。

騒然しい湯瀉の音は何時の間にか岸本の心を寂しいところへ連れて行つた。

これなども、「湯瀉のさわがしい音を聞いていると寂しくなつた」と言うことである。こんな例をあげているときりがない。